

Kadokawa Comics A.



Fate

Zero

12

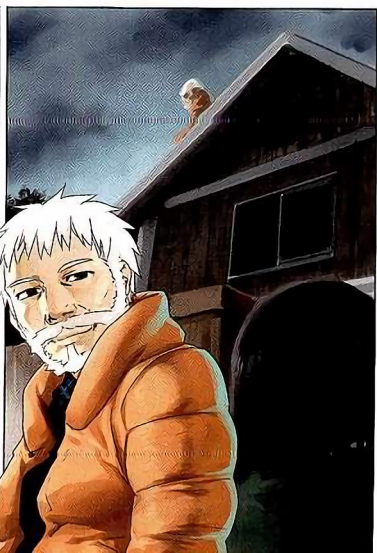
原案 真じろう 原画 虚淵玄 TYPE-MOON

イラスト 三浦アツシ

第 57 話



—25:48:06



第 57 話



Fate **Zero**
フェイト・ゼロ

視覚 真じろう
原作 虚淵玄 / TYPE-MOON
(ニトロプラス)



The logo features the word "Fate" in a white serif font on the left, with "フェイト・ゼロ" in smaller Japanese characters below it. To the right is a large, stylized black and red graphic of a sword or spear. The number "12" is written in a large, red, serif font, and the word "Contents" is written in a smaller, italicized serif font below it.

Fate
フェイト・ゼロ
12
Contents

第 57 話

001

第 58 話

031

第 59 話

071

第 60 話

099

第 61 話

131

第 62 話

167



話って
そんな……

何でまた
屋根の上で？

ここはな
普段見えない
景色が見える
場所じゃ



朝一番の光を
浴びるには
最高の場所
でなあ



余はその辺を
ぶらついて
見張っておる

遺慮は
いらん



どいつもこいつも
ホクの都合なんか
お構いなして……



せめて
明日の朝に
……

まあ
行つてやれ
坊主

あの御老
何やら折り入つて
話がある様子
ではないか





どうだ？
いい眺め
じゃろ

……



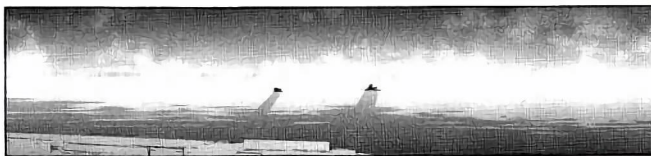
初めは出張で
来た土地
だったが……

このフユキに
骨を埋めようかと
相談したら
マーサも二つ返事で
承知してくれた

住まいは
ミヤマの丘に建てて
必ず屋根に出られる
天窓をつけようと
決めてな

……だが
クリスの奴は結局
トロントが忘れられ
なかつたんじゃないやなあ

あれの子たちは
日本人として
育つもんだと
ばかり思つて
たんじゃが



……日本が
そんなに
好きなの？

まあな

だがそれが
息子たちと喧嘩別れ
するほどの理由で
よかつたのか
といえば……

まあ悔しい
が……



——え？

こうして
お気に入りの
屋根の上に
座つてな

孫と一緒に星を
眺めるつてのが
昔から夢
だつたんじゃ

まさか叶うとは
思わなかつたが





マーサも
高い所は
苦手だし

儂が星を
眺めるときは
いつだって
独りきり
じゃった……

本物の孫たちは
この屋根に
来てくれたこと
なんぞ一度もないよ



なあ
ウェイバー

お前さん
儂らの孫
ではないね？

暗示を
破られた……



ボクは――



うん
誰なんだ
かな

まあ誰だった
としても
いいんだが

どうして
僕もマーサも
お前さんを孫だと
信じ込んでたのか
不思議ではあるが

これだけ
長生き
するとな

世の中
不思議な事柄は
どう考えたって
不思議なままだと
諦めもつくもんさ

ともかく
お前さん
……



僕らの孫にしては
ちよつと日頃から
優しすぎたわなあ

……怒って……

……ないん
ですか？



まあそりやあ
怒って当然の
ところなのかも
しれんがな……





マーサのやつ
ここ最近(ここ最近)は本当に
愉(たの)しそうに
よく笑(わ)うように
なったからなあ

以前(いぜん)じゃ
考え(かんが)えられん
ことだ

その辺(あたり)はむしろ
お前(まえ)さんがたに
感謝(かんしゃ)したい
ぐらいでな



それにお前(まえ)さんら
何か悪(わる)さをしよう
と考(かんが)えてるわけでも
なさそうだしな

お前(まえ)さんも
あの大男(おおおとこ)も
今日(けふ)日(ひ)珍しい
ぐらい性根(せいこん)の
真(ま)っ直(ただ)ぐな若者(わかもの)だ

一体(いったい)何が目当(めあ)てで
こんなことを
しとるのは僕(ぼく)が
理解(りかい)しようとしたって
仕方(しかた)ないんだろうさ

出(で)来(こ)ることなら
もうしばらく
このままで続(つづ)けて
いてほしいんじや

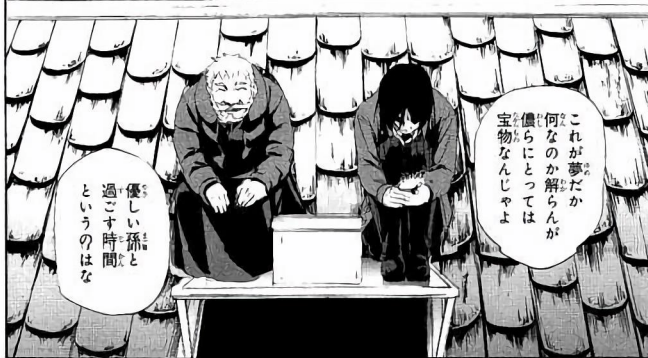
僕は(ぼく)ともかく
マーサの方は
まだ当分(たぶん)
気付(き)きそうもない

むしろな
お前(まえ)さんがたの事情(じじょう)も
知らんままはたして
頼(たの)めることなのか
どうなのか解(と)らんが…

むしろな

お前(まえ)さんがたの事情(じじょう)も
知らんままはたして
頼(たの)めることなのか

どうなのか解(と)らんが…



これが夢だか
何なのか解らんが
僕らにとつては
宝物なんじゃよ

優しい孫と
過ごす時間
というのにな

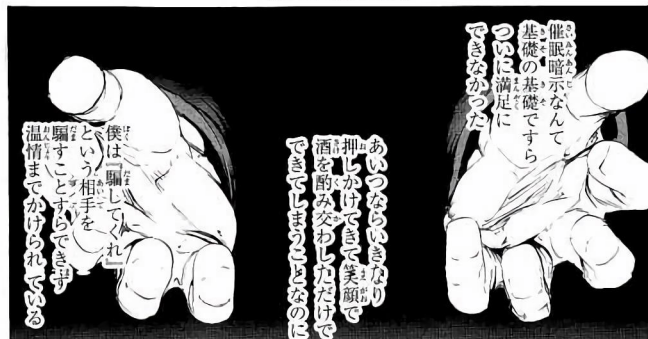


いつか必ず
神秘の奥義を
紡ぐものと信じて
疑わなかった

きつと
自分には
才能がある
つて

たとえ誰に
否定されようと
せめて自分
だけはつて

けっか
なのに結果は?



催眠暗示なんて
基礎の基礎ですら
ついに満足に
できなかつた

あいつならいきなり
押しかけてきて笑顔で
酒を酌み交わしただけで
できてしまうことなのに

僕は「騙してくれ」
という相手を
騙すことすらできず
温情までかけられている

僕はまるで——道化だ

ありもしない
ものを見つめ

目の前のものに
気づきもせず

自分好みの自画像を
鏡だとばかり
思い込んできた

僕はなんて
滑稽なんだ



無事にまたここに
帰ってこられる
保証はないんで

……申し訳
ないけど

約束は
できません



……はい




すると
命懸け
なのかね？

お前さん
がたは



これだけは
言わせて
ほしい

……
それが……
お前さんにとって
どれほど大切な
事柄なのかは
解らんが……



人生、長生き
した後で
振り返って
みればな

命と秤にかけられる
ほどの事柄なんて
結局のところ
一つもありは
せんものじゃよ





—17:21:41



教会は既に
蛇の殻だった

ほんの小一時間ほど
前まで人が居た
形跡が残っていたが

間桐邸と

遠坂邸への侵入に

手間取ったことが

致命的なロスだった

……これ以上
アイリに執着すれば
ますます敵の
術中に嵌まってしま

しかしアイリの搜索を
断念するということは
アインツベルンの
切り札といえる
「聖杯の器」を
手放すということ

僕はもはや外来の
マスターと何ら
変わらない

ならば先の先を
取るまでだ

聖杯降臨の儀式を
執り行うことが
最終目的と
される以上

その祭壇として適切な
場所を確保することは
勝利者にとって
避けては通れない

そこに
付け入る

冬木において
聖杯の召喚場所
に相応しいだけの
霊格を備えた土地は
四か所



第一の要所は
天然の大洞窟
一龍洞を擁する
円蔵山

ユスティーツァの
基盤とする
大聖杯が設置され

御三家のみが知る
秘密の祭壇として
一八〇年の昔から用意
されてきた大本命だ

土地の提供者である
遠坂家はここを
拠点として確保する
優先権を持っていたが

魔力が強力すぎ
次代の術師を育成する
生活の場としては
危険すぎた

結果遠坂は
第二位の霊脈に
居城を構える
ことにした



ここも大聖杯には
劣るものの
聖杯を降臨させるには
十分な電力で
支えられている

第三位の霊脈は冬木教会が建つ丘

間桐邸は別の場所へと移築され、霊脈は後から介入してきた聖堂教会に確保された



当初マキリが有じていたが、後々に土地の霊気が一族の属性にそくわないことが判明

霊格の点では第二位とさほど遜色はない

第四の霊脈はもともとの土地に存在したものではない

その後の調査で儀式に十分な霊格が備わっていることが確認され

三度目の聖杯戦争からは候補地としてマークされるようになった

三つの霊脈が魔術的に加工されたことで微妙に変調をきたしたマナの流れが

一〇〇年余りを経て吹き溜まりを成しとある二点に纏るようになった結果出現したもの



現在ここは新都の新興住宅街の真ん中に位置し問題のポイントには真新しい市民会館が建てられている

最終的にはこの
四カ所のどこかで
儀式を完成させ
なければならぬ



そこに先んじて
罫を張り
待ち伏せることが
出来ればチャンスは
充分にある

おそらく
言峰綺礼は
ここで儀式を
行うつもりだ



霊脈のある冬木教会と
遠坂邸を放置したのは
より高位の霊地で
儀式を行うためだろう



残るのはこの
円蔵山の
大聖杯しかない



たとえミスリードであつたとしてもあの二カ所には十分すぎるほどのトラップを仕掛けた



第四の霊脈である冬木市民会館も無視はできないが



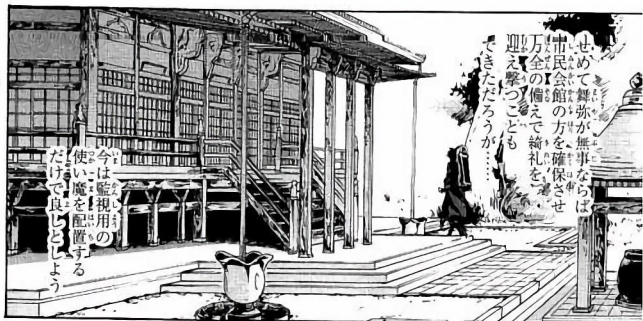
あそこは呪的な防衛が施されることもないまま現在に至った素の土地

他の三候補地が攻めるに難く守り易い地勢であるのに対し市民会館は要害の体を成していない



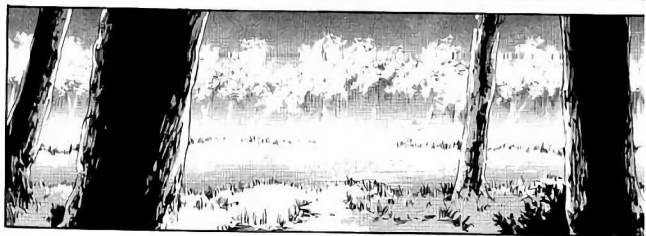
もし仮に言峰綺礼が現れたとしてもそのときは正面切つて強襲をかけるまでのこと

それはたじかに最悪の展開ではあるが後手に回つてしまった場合のリスクが一番低いのもあそこだ



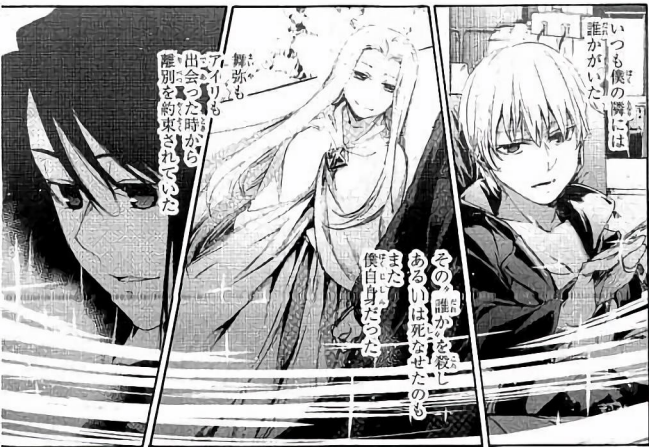
せめて舞弥が無事ならば
市民会館の方を確保させ
万全の備えて贈礼を
迎え撃つことも
できただろうが……

今は監視用の
使い魔を配置する
だけで良しとしよう



……
そういえば

チームを組まない
単独行動の経験は
考えてみれば
意外と少ないな



いつも僕の隣には
誰かがいた

舞^ま弥^やも
ア^アイ^イリ^リも
出会^あった時^{とき}から
離^{わか}れ^{わか}れ^{わか}
を約^{やく}束^{たば}と^と
されて^された^れ
いた

その^{その}誰^{たれ}か^かを殺^{ころ}
し^し
ある^{ある}いは死^しな^な
せ^せた^た
の^のも
また
僕^わ自^じ
身^{しん}だ^だ
つ^つ
た



案^あの定^さまた僕^わは
独^{ひとり}り生^いき残^{のこ}
つ^つ
たま^ま
ま
最^{さい}後^ご
の戦^{いくさ}
いに
臨^まも^も
うと^と
して^{して}
いる

自^じ分^{ぶん}
のよ^よ
うな^な
人^{ひと}
間^ま
が
誰^{たれ}
か^か
に^に
見^み
守^{まも}
ら^ら
れ^れ
て
逝^い
く^く
な^な
ど^ど
と

こ^こん^んな^な風^{かぜ}に^に始^は
まり
こ^こん^んな^な風^{かぜ}に^に終^は
わ^わ
る^る
の^のが
き^き
つ^つ
と^と
僕^わの^の
天^{あま}
命^{なま}
な^な
の^の
だ^だ
ろ^ろ
う

そ^そん^んな^な不^ふ
理^り
が
許^{ゆる}
さ^さ
れ^れ
る^る
は^は
ず^ず
も^も
な^な
い



そういうえはアレを
味方の頭数に入れて
いなかった……







……では
私は引き続き
アイリスフィールの
捜索に戻ります

何かあった時には
以前のよう
に命呪による召喚を



……



切嗣を単独で
捨て置くことに
不安はない

いざ私を必要とする
局面になれば
昨晚のように令呪で
呼び寄せるだろう



聖杯の争奪という
観点に立つならば
切嗣の行動
こそが上策

だからこそ
この場は任せで
おけばそれでいい



斬り伏せるべき
敵の姿は見えない

守るべき
ものの在処も
見定められず

向かうべき場所
さえわからない

ただ
三刻の猶子もない
という確たる直感
だけが——ある

Fate 
フエイト/ゼロ

In the battleground, there is no place for hope.
What lies there is just cold despair and a sin called victory,
built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,
it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil and if so,
it is best to end them in the best efficiency
and at the least cost.

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

第 58 話



時臣師を排除し
間桐雁夜を籠絡

さらに
自らの所在の
隠匿に成功

聖杯の器を
確保した上で
セイバーと
ライダーを相争わせ

運気に助けられた
部分もあるとはいえ
万事がこれほど
上首尾に運ぶとはな

後はセイバーかライダー
勝ち残った方に
アーチャーを宛てがえば
サーヴァント戦は決着だ

対ライダー戦に備えて
策を巡らせておきたいが
アーチャーは
良しとしないだろう

万が一両者が生存
あるいは共闘しても
バーサーカルが
セイバーを狙う

まあいい

もともと奴は
手駒として
操れるような
サーヴァント
ではない

憂慮すべきはむしろ
サウワアン小戦の
増外にある謀略戦

そこにこそ
本命とも
いうべき
敵がいる

衛宮切嗣

もし奴に主導権を
奪われたら最後

私はその姿を
目にする事なく
背後から仕留め
られるだろう

それでは
意味がない

だが衛宮切嗣が
この貯水槽を捕捉
してないことは
まず確実だ

さもなければ
雨生龍之介は
より早い段階で
抹殺されていた

この場所を知る
ライダー陣営も今更
ここを気に掛けは
しないだろう



何？！
この流れ込んで
くる魔力は……

気分が悪い……



ラ……



聞こえて
いるか？
女



—16:05:37



相変^{あひかわ}わらず
協力的な態度では
なさそうだが
私ではそんなに
不満^{ふまん}かね？



間もなく
聖杯戦争は
決着する

おそらくは
この私がお前たち
アインツベルンの
悲願を遂げる担い手
となることだろう



言峰……
綺礼……

そう

案の定
お前の差し金
だったのね……



解せぬな

貴様は
聖杯を
運ぶ人形

儀式の達成
こそが最大の
目的のはず

この期に及んで
なぜそこまで
特定のマスターに
固執する？



当然よ

私が聖杯を
託すのは
ただ独り…

断じて
お前など
ではないわ

解るはずも
ないでしょう
ね…

聖杯に託す
折りさえ
持たない
お前には



言峰綺礼

お前は戦う意味
すら解らない
……慮ろな男

お前では決して
あの人には
勝てない…

私の
騎士が…

私の
夫が

……いずれ
必ずお前を
斃す…



……なぜ貴様が私について語る？



なぜこの人形はそこまで適確に私の本心を見抜いている？

師も父も妻ですら私を理解できなかったというのに



覚悟なさい

きっと切嗣は誰よりも冷酷に

誰よりも容赦なくお前に牙を剥く



お前の中身はすべて衛宮切嗣に見抜かれているわ

だからこそ彼はお前を警戒し最悪の敵と見なしてきた……

フフ怖いの？

いいわ教えてあげる……

成る程
あの男ならば
成いは

この私を理解
しうる存在がいる
とするならば
きつとそいつは
自分の同類であろう

感謝
するぞ
女

それは
私にとって
福音だ

衛宮切嗣は
やはり私が
考えていた通りの
男だったのだな





切嗣にお前が見抜けたとしてもその逆は有り得ないわ

……あの人の精神に在るものをお前は何ひとつ持ち合わせていないのだから



アブツ



……
認めよう

ガッ
ガッ
ガッ

だがそんな
私と切嗣が
どう違う？

そこから
何を学ぶ
こともなく！

あれほどの
永きに亘り
何の益もない
戦いばかり
身を投じて――

確かに私は
空虚な人間だ
何ひとつ
持ち合わせて
いるものなどない



ただ殺戮だけを
繰り返して
きた男が！

あれほどの
徒勞が！

あれほどの
無軌道が！

迷い人で
なくて
何なのだ!?



ヤツが願望機に
託す祈り
とは何だ!!



さあ
人形!

答えがある
というのなら
この私に
告げるがいい

衛宮切嗣は
何を望んで
聖杯を求める?



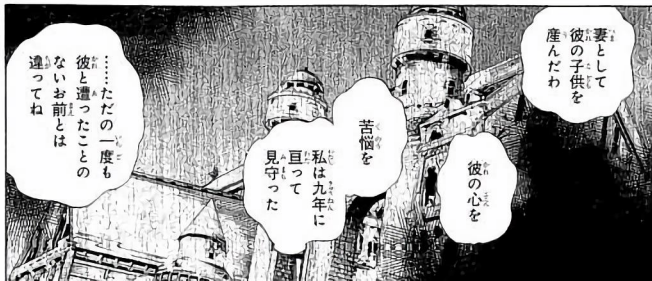
……教えて
あげる……

……
いいわ……

恒久的
世界平和よ

衛宮切嗣の
悲願は
人類の救済

あらゆる
戦乱と
流血の根絶





アイリスフィール・
フォン・
アインツベルン

貴様は
九年の歳月を
良き妻で在り
続けたのか？

衛宮切嗣の
愛情を
勝ち取って
きたのか？



……なぜ
そんなことを
お前が気に
かけるの？

解せぬ
からだ

貴様らの
絆が

だが衛宮切嗣が
聖杯を求める男なら
お前はその悲願を
遂げるための道具に
過ぎないはずだ

余計な愛情
など注ぐ
道理がない

お前は切嗣を
夫として誇り
信認している

まるで本物の
夫婦である
かのように



……そんな彼を
愚かと笑うなら
私はお前を
赦さない



それだけは
誰にも
侵かかさせない



ならばお前は
妻つまとして完璧
であろうよ



だが
だからこそ
切嗣キツネの気が
知れない

そこまで
妻である
お前を愛して
おきながら
なぜ……

恒久的な
世界平和
だと？

なぜそんな
無意味な
理想のために
愛する者を
犠牲にできる？



……私には
父も母もない
愛によって
産み落とされた
身体でもない

だから
「良き妻」が
どんなものか
知りようもない

それでも……
彼から与え
られてきた愛こそ
私にとっての全てよ

……
奇妙な
問いね

誰であれ
嗤うだろう

思慮分別の
ある大人なら

お前のような
自らも認める
ほどに無意味な
男が……

他人の理想を
無意味と
嗤うの？

闘争は
人間の本性だ

それを根絶
するというなら
人間を根絶
するのと同然だ

これが無意味
でなくて
何なのだ？

衛宮切嗣の
理想とは――

……だからこそ
彼はとうとう
奇蹟に縋るしか
なくなつた
のよ……

あの人は
追い求めた
理想のために
すべてを
喪つてきた……

救いようもない
モノを救う
矛盾のために
常に罰せられて
奪われてきた……

そもそも
理想として
成り立つて
いない

まるで
子供の
戯れ言だ！

私もまた
そういう
一人よ

今日までに
幾度となく彼は
愛する人を切り
捨てる決断を
迫られてきた……



そうよ

切嗣は理想を
追うには
優しすぎる人

いずれ喪うと解り
きつた相手さえ
愛さずにはいられ
ないなんて……



……



これが
今回限りの
話ではなく

——あの
男の生き方
そのものだ？

招





結局のところ私は
ことの始まりから
大きく履き違えて
いたのだろう



疑問には
合点がいった

そして期待は
落胆に散った

衛官切嗣は
無意味な行いに
葛藤しながら
答えを掴んできた
のではない



あの男はただ単に
価値あるモノを
全て無意味に帰して
きただけなのだ

願いを持たなかった
のではなく
有り得ないものを
願ったからこそ
虚無の連鎖へと
墜ちていった

その徒勞が
その浪費が

あまりにも
愚かしく
度し難い

すべて切り捨てる
ばかりの繰り返し
だったという
衛宮切嗣の生涯

あの男が放棄して
きたという
数多の喜びと幸福

そんな小さな
一片すら見出せずに
迷い続けた私からすれば
あの男の生き様は
もはや憧憬も羨望も
通り越した果てにある

そのうちもつとも
些細な断片でさえ
私から見れば
生命を懸けて守り抜き
殉ずるに足りるだけの
価値があったはずなのだ

あの癒しようの
なかつた飢えが

埋めようの
なかつた喪失が
そこまで眩められ
愚弄されたなら――

なぜこれを
赦せようか？


憎まずに
いられようか？

もはや聖杯など
興味ない

ワは

ははは
はは

願望の成就など
まったく眼中に
なくともそれでいい



その奇蹟に全てを
賭した一人の男の理想を
目の前で木っ端微塵に
砕いてやる事が
できるなり



たとえ自らにとつて
何の価値もない
聖杯であるとしても
奪い取るだけの
意味はある!



—04:16:49





ん？
おお
坊主 目が覚めたか



夜になったら
起こせて
言っておいたのに
何やってたんだよ
オマエ



あくすまん
すまん

つい夢中に
なって
しまってたなあ

だがまあ今夜は
いつもほど焦らず
落ち着いて
構えていた方が
いい気がしてな

何でさ？



コソコソ



まあ何と
なくな

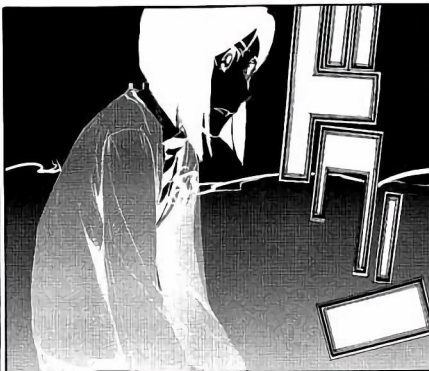
べつだん根拠が
あるわけでもないが
今夜あたりに決着が
つきそうな予感が
するのだ



ボクの知る限りでは
脱落した競争相手は
アサシシと
キヤスタルだけ

でも当然ボクらの
競い知らぬ場所でも
戦局は推移
しているはず

昨夜のセイバーも
何かを焦っていた
様子だった





「運成」と
……「勝利」

まさかあれ
聖杯戦争が
決着したって
意味なのか？

でもあれ
冬木教会の
方角とは
全然違う

聖堂教会の
連中が上げた
狼煙じゃ
ないのかも

ああ
なんだ
そういうこと
なら納得だ

な何
だよ？



要するに誰か
気の早いヤツが
勝手に勝ち鬨を
吼えとるわけだ

「文句がある
なら此処に
来い」という

アレは挑発
であろうよ

つまりは決戦の
場所を定めて
誘いをかけてる
ってことだ

よいよい

探し回る
手間が省けた
というものだ

あんな
挑発を受けて
黙ってられる
サーヴァントが
おるはずもない

生き残ってる
連中はすべてあの
狼煙の場所に集結
することだろう

余の睨んだ通り
今夜が決戦の
大一番と
なりそうだな

そうか
……

これが最後
なんだな

応ともさ

さあ 目指す戦場が
定まったとあれば
余もまた「騎手」の
クラスに恥じぬ形で
馳せ参じなくては
なるまいて

世でよ
我が愛馬!





さあ坊主

戦車の御者台よりは
ちよいと荒れる
乗り心地だが
まあそこは腹を
括って耐えることだ



ほれ
乗るがいい



ボクには
そこに
座る資格
なんてない

こんな無能な
魔術師に――



ボクこそ勝利者にぬか
相応しいと
ずっと舞い
上がったいた

けどそれは
驕りに
過ぎなかつた

ボクは自分の
力量も弁えず
ライダーの足を
引っ張ることしか
できなかつた

あの時だって
セイバーに勝た
かもしれないのに
ボクを守るために
戦車から飛び降りる
じかなかつた



本物の英雄とは
ボクなんかには
及びもつかない
雄大で英知と勇氣に
溢れた輝かしい
存在だった

そんなアサツと比べて
ボクは一体何なんだ

凡庸で器の小さい
どつしようもない
小心者じゃないか!





我がサーヴァントよ
ウエイバー・
ベルベットが令呪を
もって命ずる！

せめてあの背中を
隠さずに見守る
ことができる
なら




ライダーよ
必ずや最後まで
オマエが
勝ち抜け！

……けど
負け犬には
負け犬なりの
意地がある！



重ねて
令呪をもって
命ずる！

ライダーよ
必ずやオマエが
聖杯を掴め！




さらに重ねて
令呪で命ずる



ライダーよ

必ずや
世界を掴め



失敗なんて
許さない



これでボクはもう
オマエのマスター
でも何でもない

さあ
もう行けよ
どこへ
なりとも
行つちまえ



うむ



オマエ
なんか
もう……



もちろん
すぐにも
征かして
もらうが


ブルル

ポス

あれだけ口喧しく
命じた以上は
もちろん貴様も
見届ける覚悟
であろう？

すべての
命令が遂げ
られるまでを





マスターじゃ
ないにせよ
余の朋友である
ことに違ひは
あるまい



本当に……
いいのか……

ポロ

オマエなんかの
隣で……ボクが……

ポロ

……ポ……
ボクが……

ボクなんか
……で……



ならば
朋友だ

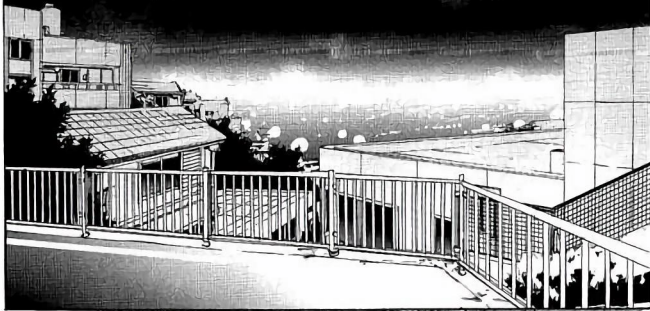
胸を張って
堂堂と余に
比肩せよ

……ッ

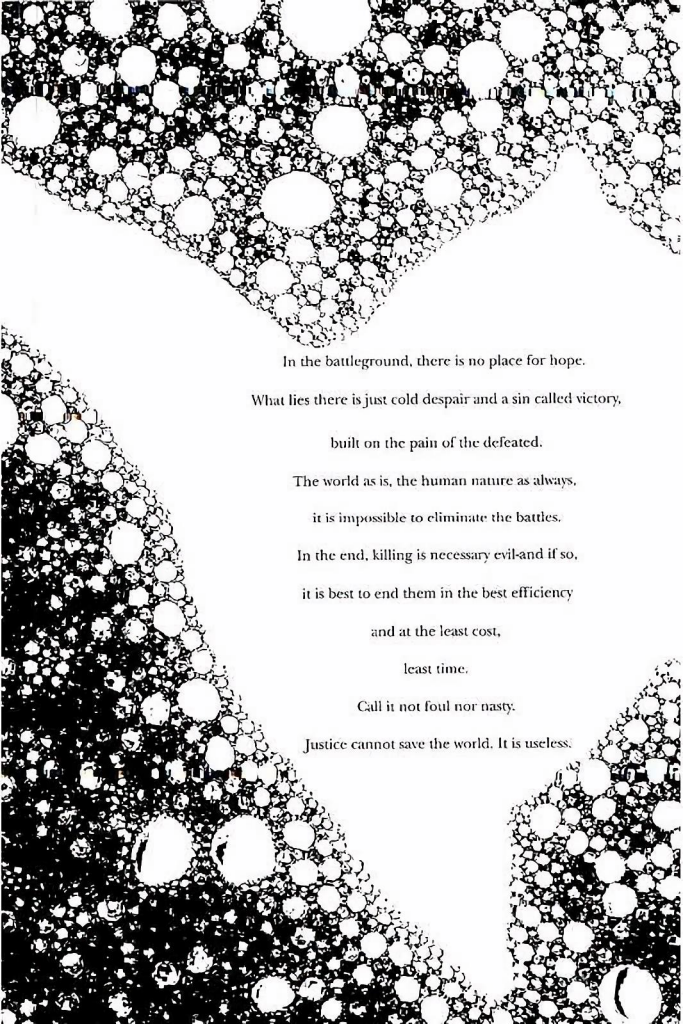


あれだけ余と
共に戦場に臨んで
おきながら今さら
何を言うのだ
馬鹿者

貴様は今日まで
余と同じ敵に
立ち向かってきた
男ではないか



Fate *Zero*
フレイト・ゼロ



In the battleground, there is no place for hope.

What lies there is just cold despair and a sin called victory,

built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

it is best to end them in the best efficiency

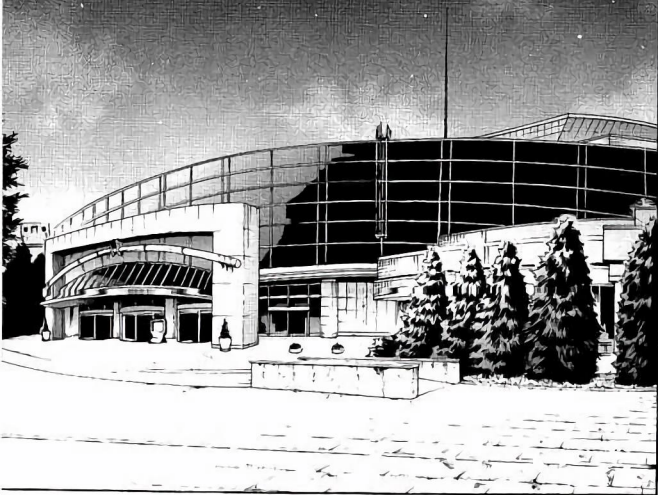
and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

第 59 話









綺礼よ
見たところ
戦う意味に
ついては答えを
得た様子だが



最悪の展開
だが

そうならば
それもまた
運命だな



今でも
まだ聖杯に
託す折りは
ないのか？

奇跡を
手にしても
何ひとつ
望まぬと？



ああ
それが
何か？



未完成とはいえ
「器」そのものは
既にお前の
手の内にある

今ならば
悲願の先約
ぐらゐは受理
されるかも
しれないぞ



.....



成る程な

もしそれが可能なら
聖杯が降臨すれば
即座に奇跡が遂行
されるわけか



致し方ない
とはいえ
辺り一帯は
民家だからな

出来ることなら
もつと徹底的に
人払いができる
場所であらねなく
決着をつけたかった



やはり願
い
などは
思いつかん



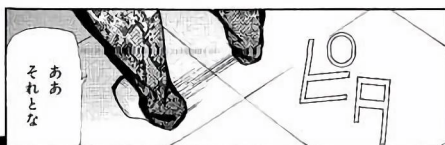
強いて言うなら
この最後の戦いに
余計な邪魔が
入らないでほしい
ことぐらいか



やはりお前が心に
秘めたモノは
聖杯の側から
汲み取らせるしか
あるまいよ

卑れやれ

お



ああ
それとな

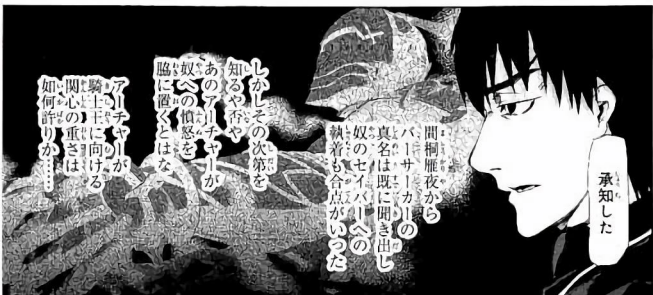
LOA



もし仮に我が
戻るより先に
セイバーが現れる
ようなら――

そのときは
バーサーカーと
戯れさせて
やるがいい

あの狂犬は
そのために
今日まで生かして
おいたのだからな



承知した

間桐雁夜から
バーサーカーの
真名は既に聞き出し
奴のセイバーへの
執着も合点がいった

しかしその次第を
知るや否や
あのアルチマーが
奴への憤怒を
脇に置くとはな
アルチマーが
騎士王に向ける
関心の重さは
如何許りか



そういえば
綺礼

セイバーが後生大事に
守っていた人形めは
どうした？

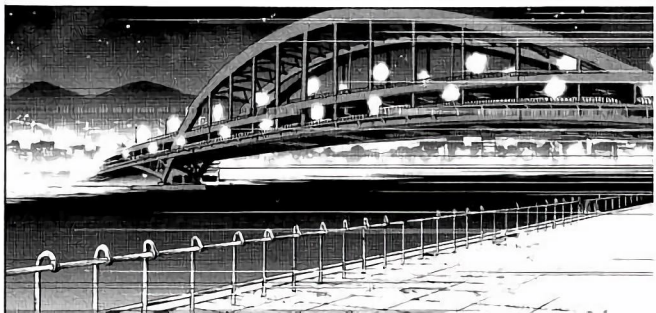
何でも
聖杯の器とやらは
アレの中にある
という話だったか

ああ
あれか



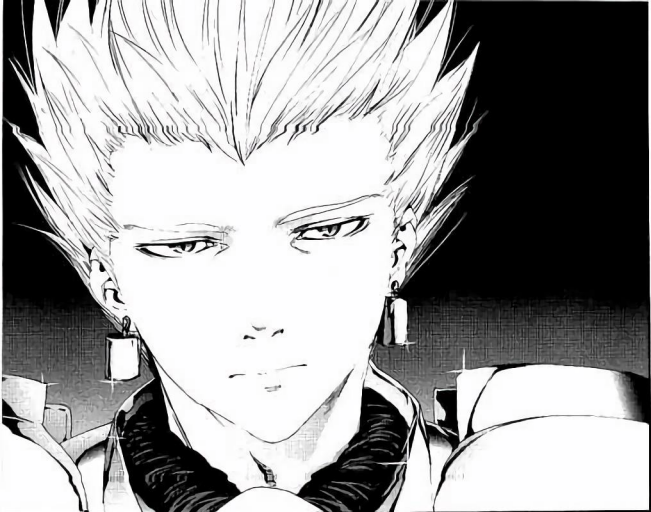
ついきつき
殺したよ

もう生かして
おく理由も
なかったのだな









それともこういうの
オマエ流に言うなら
「心が躍る」って
やつなのかな



その通りだ
敵が強大であるほどに
勝利の美酒に馳せる
想いが至福となる

フン
弁えてきた
ではないか



怖い
か？
坊主

ああ……
怖い
ね







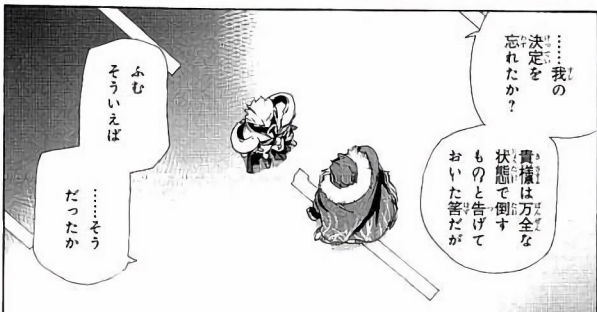
ライダー
自慢の戦車は
どうした？



ああ
それな

うん

乗腹ながら
セイバーの
ヤツに持って
行かれてなあ



……私の
決定を
忘れたか？

貴様は万全な
状態で倒す
ものと告げて
おいた筈だが

ふむ
そういえば

……そう
だったか



確かに
余の武装は
消耗してゐる

だが
侮るなよ
英雄王

今宵の
イスカンドルは
完璧でないが故に
完璧以上のものだ



成る程
確かに充溢する
その王氣

いつになく
強壯だ

どうやら何の
勝算もなく我の
前に立ったわけ
でもないらしい



なあ
アーチャー
宣言といえ
もう一つ

前の酒宴で
申し合わせた
件もありた
であらう

お前とは
殺し合うしか
他にない
という結論か？

その前にまずは
残った酒を
飲み尽くすという
話だったではないか

あの方は無粋な
奴らが宴席を
ぶちこわしに
しおつたが……

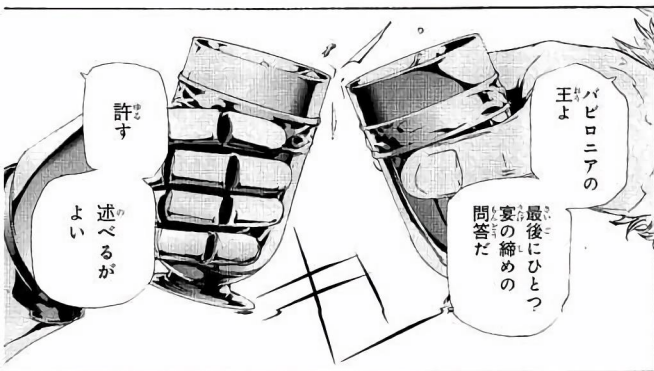
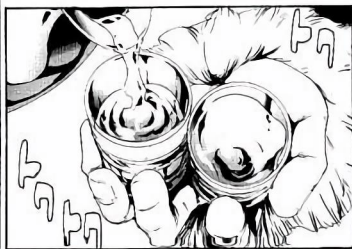
さすがは
魔尊の王よ

他人の
持ち物に
ついては
目敏いな

余の目は
誤魔化せん

あの瓶酒
まだ少し
ばかり残って
おつたぞ





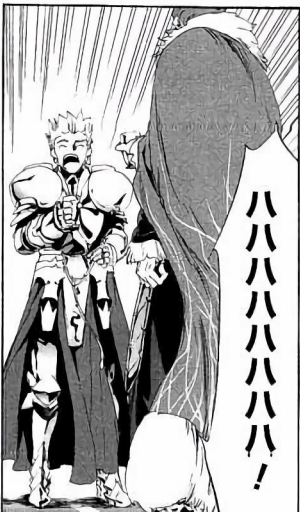


ふむ
それで?



たとえばな
余の「王の軍勢」を
貴様の「王の財宝」で
武装させれば
間違いなく最強の
兵団が出来上がる

西国の
プレジデント
とかいう奴も
屈じやあるまい



ハハハハハハハハハハ!



改めて
余の盟友と
ならんか?

我ら二人が
結ばばきつと
星々の果てまで
征服できるぞ



つくづく
愉快な
奴よな！

……
道化でもない奴の
痴れ言でここまで
笑ったのは
久方ぶりだ！



生憎だが
我は二人目の
友など要らぬ

我が朋友は
後にも先にも
ただ一人のみ

そして
王たる者も
また二人は
必要ない



孤高なる
王道か

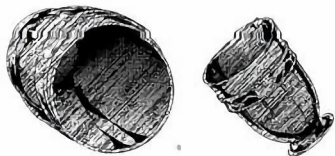
その揺るがぬ
在りように
余は敬服をもつて
挑むとしよう



良い

存分に
己を示せよ
征服王

お前は我が
審判するに
値する賊だ





あるいは余が
生涯最後に視線を
交わす相手になる
かもしれんのだ

邪険に
できるはずも
なからうよ



オマエら
本当は仲が
いいのか？

まあ今から
殺し合うと
あつてはな



そりだな

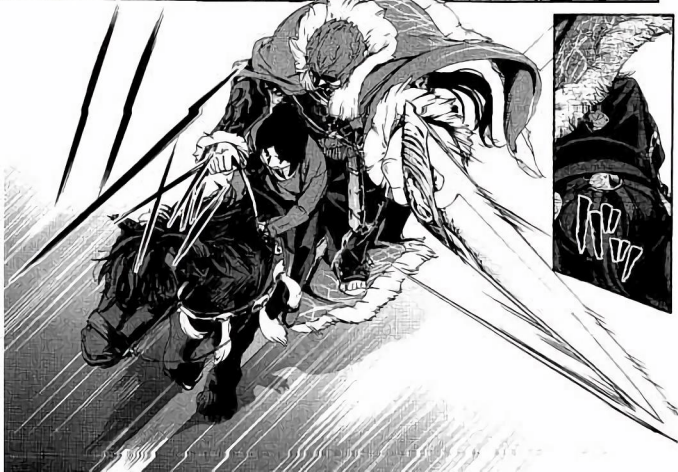
——ああ
その通り
だとも




……馬鹿
いふなよ

オマエが
殺される
わけないだろ

承知しないぞ
ボクの令呪を
忘れたか？





今宵、我らは
最強の伝説に
勇姿を印す！

集えよ
我が同胞！



ああ……

敵は
万夫不当の
英雄王！

相手に
とって
不足なし！

いざ
益荒男
たちよ！

原初の英霊に
我らの覇道を
示そうぞ！








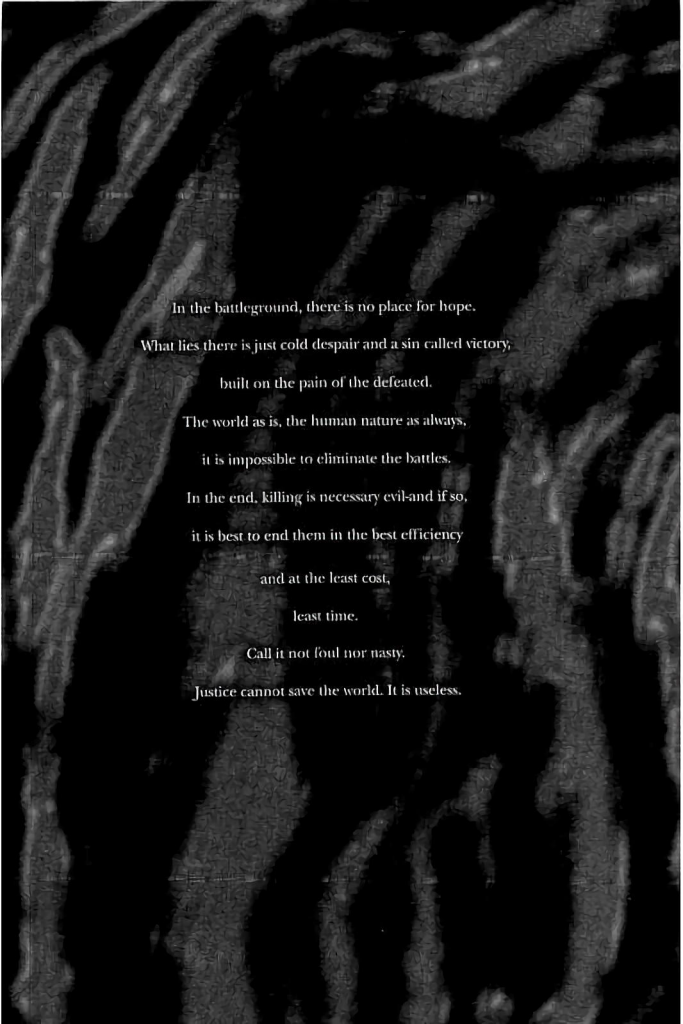


来るがいい
覇軍の主よ



今こそお前は
真の王者の姿を
知るのだ……

Fate 
フレイターゼロ



In the battleground, there is no place for hope.
What lies there is just cold despair and a sin called victory,
built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,
it is impossible to eliminate the battles.

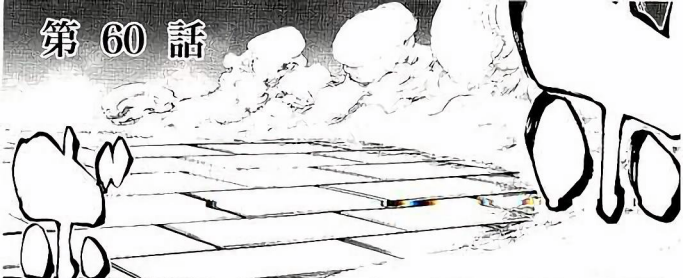
In the end, killing is necessary evil-and if so,
it is best to end them in the best efficiency
and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

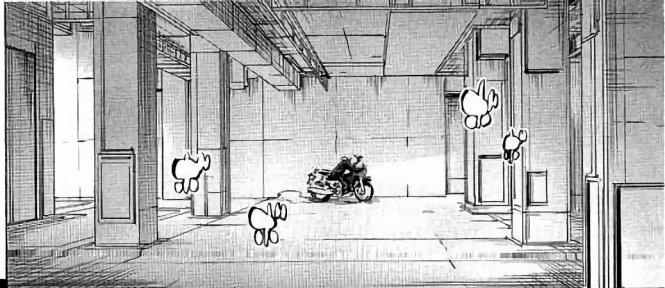
Justice cannot save the world. It is useless.

第 60 話



気が配がない
敵が潜むのは
建物の中か

降臨

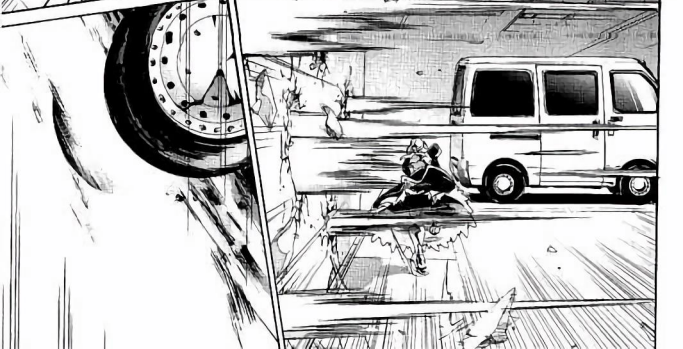


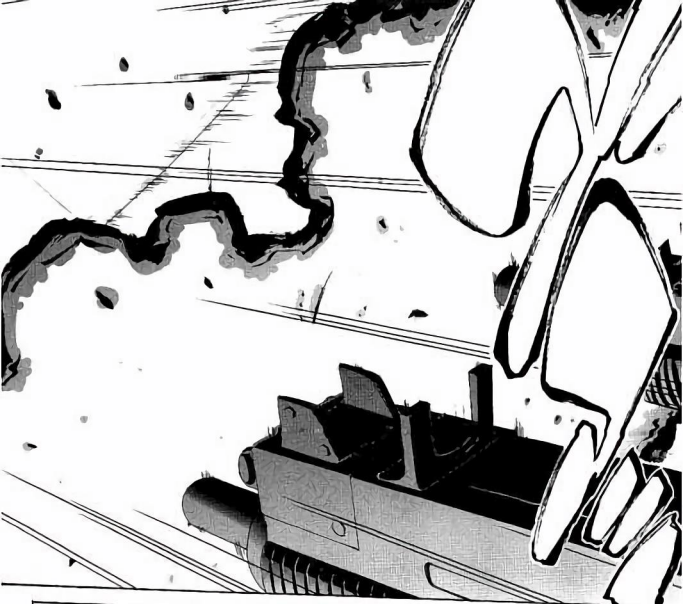


サーカー

あの武器
は
ツツ















—ッ!!

見えないはずの
「風王結界」の
剣筋を





この黒騎士は
異常な執念を
見せながら私に
襲いかかってきた

もしあれが
マスターの指示でなく
自身の怨恨によるもの
だとしたら――



このパーサーカーは
宝剣の姿を明らかに
見知っている

それは即ち
英霊となる前の
私についての既知で
あることと同義



……その武練
さぞや名のある
騎士と見込んだ上で
問わせてもらう!

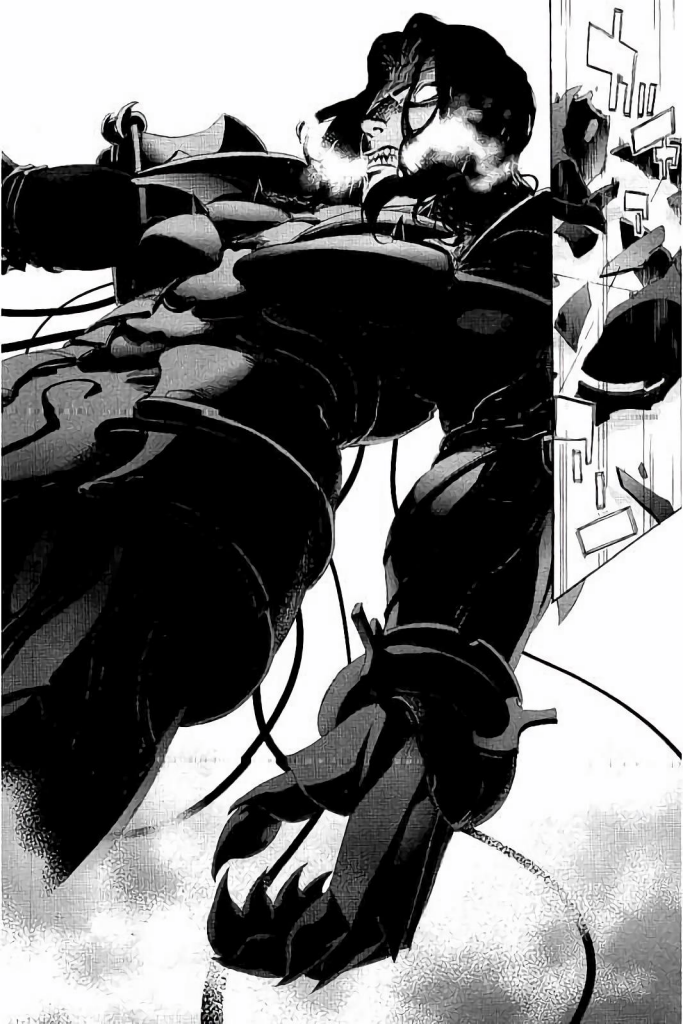
この私を
ブリテン王
アルトリア・
ペンドラゴンと
弁えた上で
挑むなら――

騎士たる者の
誇りをもって
その来歴を
明かすがいい!



……笑い
声……？









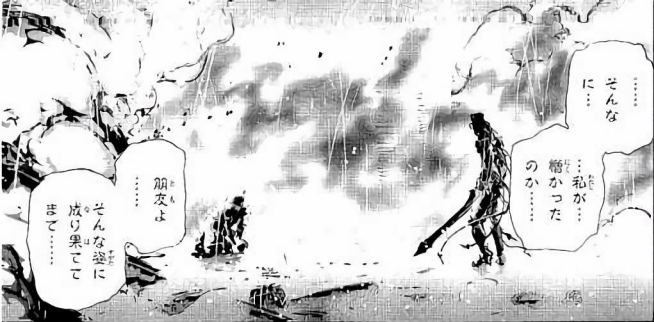
いずれ英雄として
最低限の誇りさえも
見失う羽目になる

あ……



……貴方は……

……そんな
に……



……
そんな
に……

……私が……
憎かった
のか……

……
朋友よ

……
そんな姿に
成り果てて
まで……



サー・ランスロット
湖の騎士！

そうまでして
私を恨むのか





—03:59:32



あらゆる予測が
裏切られたことで
奴の正体がようやく
把握できた

あの男は
聖杯に
興味がない

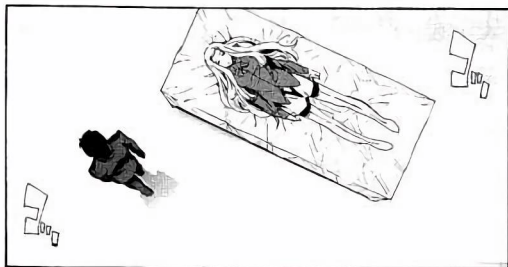
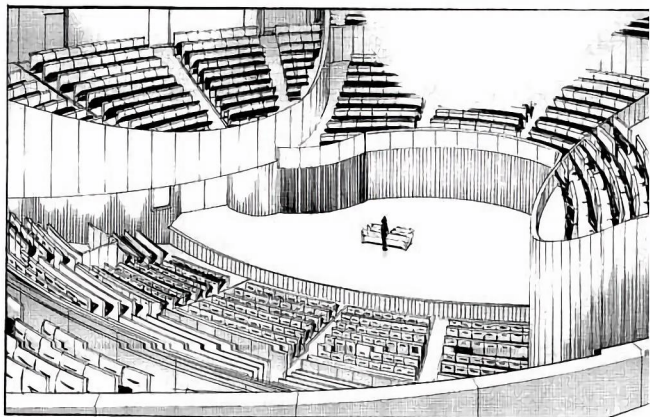
ここは魔術的に
脆弱な若だというのに
守りの備えを講じた
形跡が一切ない

言峰綺礼はただ単に
待ち伏せの可能性が
最も低い場所として
ここを選んだ

無事に聖杯を
降ろすことよりも
残るマスターとの
最終決戦そのものを
有利に運ぶ主導権を
欲じたんだ

奴の狙いはこの僕だ





アーチャーは
大橋でライダーを

バイクカーは
地下駐車場で
セイバーを

万事理想通り
もう誰も私の
邪魔をしない

煙の匂い
どこかが燃えて
いるようだな

地下での
戦闘が原因か

だが火災警報を含め
外部に繋がる回線は
すべて遮断済み

火の手が建物の外に
まで及ばない限り
近隣の住民も気付く
ことはあるまい

主は我が
魂を蘇らせ

御名のために
我を正道へと
導かん

たとえ死の谷の
陰を歩むとも
禍を惹くるまじ

主が我と共に
あるが故に

居る

今こそ
出会いを
確信する

私が彼を
求めるように

あの男は
すぐ近くまで
来ている

奴もまた
私を求めて

祝福を感じる

生涯にただの
一度も私を
顧みることの
なかつた神が

今ようやく
導きを
示している

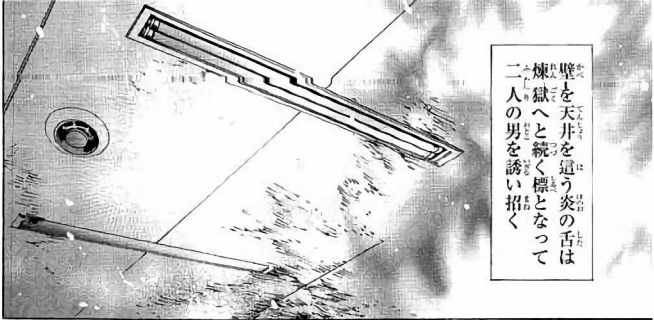
求めていたのは
この憎しみだ

歓喜とともに
剣を執る理由だ


貴方の鞭と
貴方の杖が
私を慰める

貴方は我が敵の
前で宴を設け
我が頭に油を
注がれる


杯は溢れ
我に恵みと
慈しみを
もたらさだろう




壁を天井を這う炎の舌は
煉獄へと続く標となつて
二人の男を誘い招く



彼らは
黙々と進んだ

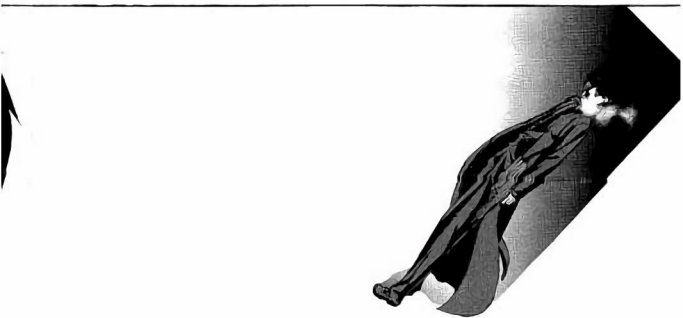


揚々と進んだ



迷^まうことなく
対決^{たいけつ}の場^ばへと――

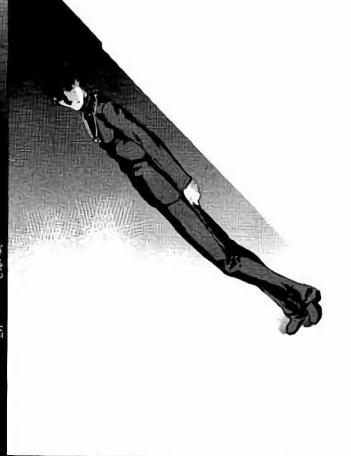






七人の
マスター

ついに直接にお互いを
目の当たりにした二人



七人の
サーヴァント



そのとき同時に
ひとつの結論を了解する

そんなものは所詮
ただの状況でしか
なかったのだと






言峰綺礼にとつて
この冬木の戦場は――

衛宮切嗣にとつて
この戦いは——





すべていま目の前に
立ちはだかるあの敵を
討つためだけにあったのだ

Fate 
フェイト/ゼロ

In the battleground, there is no place for hope.
What lies there is just cold despair and a sin called victory,
built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

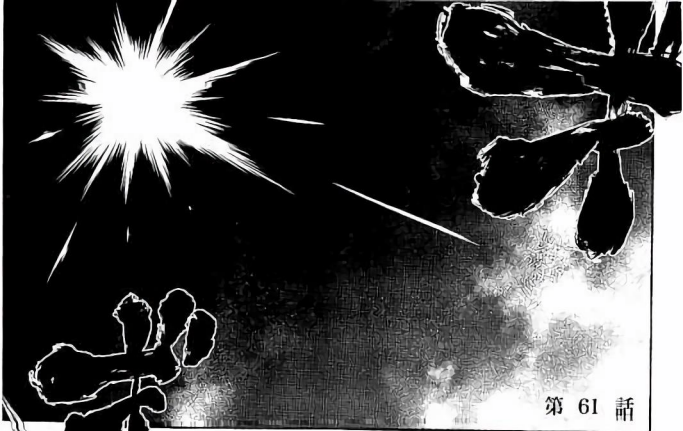
it is best to end them in the best efficiency

and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.



第 61 話

—03:59:04







アムニファイ!!

Lalalalie!!

Lalalalie!!



だが兵どもよ
弁えていたか?


夢を束ねて
覇道を志す
.....

その
意気込みは
変えてやる



夢とは須く
醒めて消えるが
道理だと





さあ 見果てぬ
夢の結末を
知るがいい

この我が
手ずから
理を示そう



『エスママ天地乖離エリシユ寸開闢の星』を!!

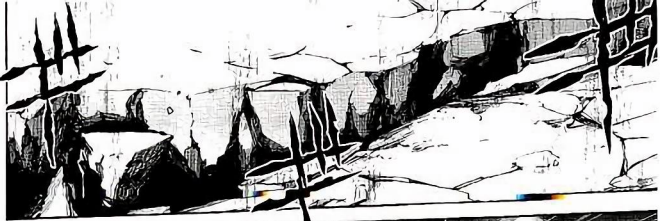
いざあお仰げ!

さあ目覚めろ
『乖離剣』よ
お前にあま相応あがしき
舞台がまじ整った!

来るぞッ!







むん!?

ひっ……!



はあッ!





対軍宝具
でもない

なんて
規格外……

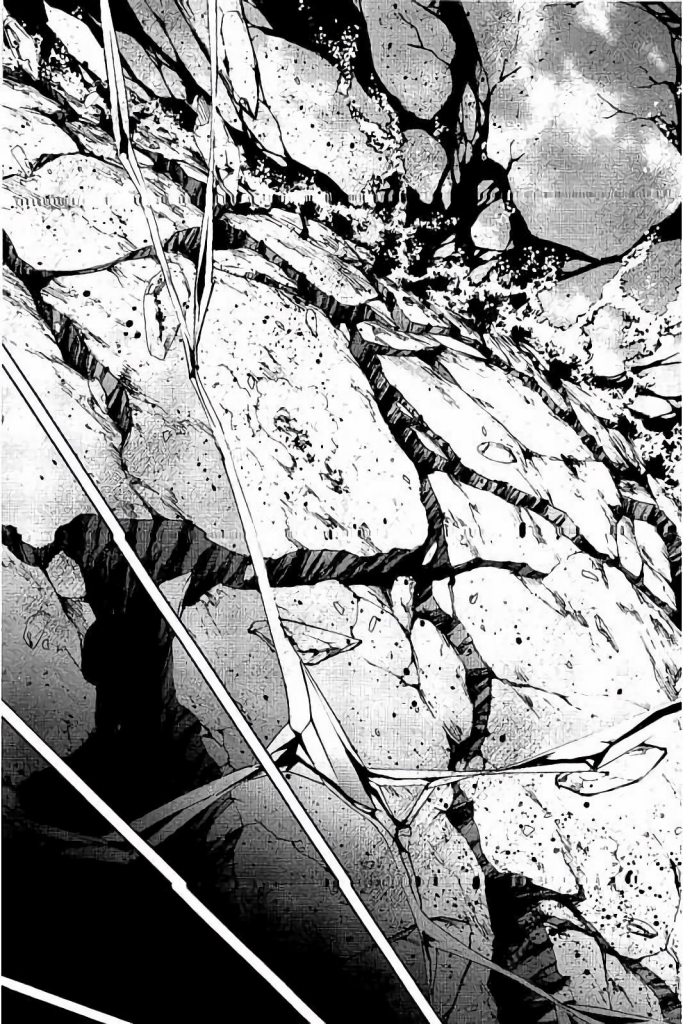
対城宝具の
域にすらない





これは『対界宝具』だ









そういえば
ひとつ訊いて
おかねばならない
ことがあったのだ



.....



ウェイバー・
ベルベットよ

臣として
余に仕える
気はあるか？



……あなた
こそ——

あなたこそ
ボクの王だ

どうかボクを
導いてほしい

同じ夢を
見させてほしい

あなたに
仕える

あなたに
尽くす

うむ
良からう







まさしく
あの英雄こそ
天上天下に
最強最後の敵だ

ヤツは強い

あまりにも
強い



なればこそ

なぜ征服王が
挑まずに
おれようか

アレを乗り越えた
その先こそが
世界の果てだ



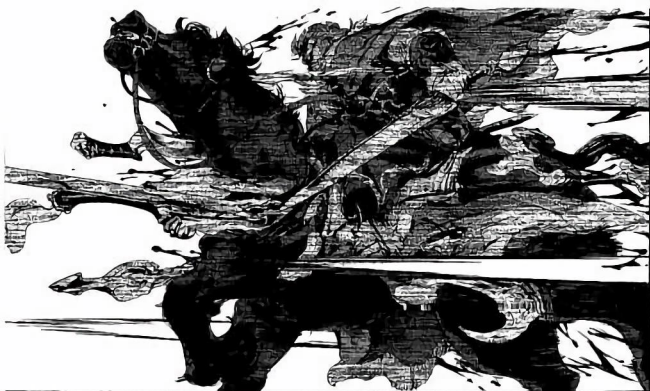
「彼方にこそ
榮え在り」

届かぬ
からこそ
挑むのだ!

覇道を謳い！
覇道を示す!

この背中を
見守る臣下の
ために!







ならば
超える！

あの敵の上を
踏み渡り
最果てへと至る！



何もかも

聞こえない

風の音も

何を嗅
いてる？

だが耳に響くこの音は——？




この胸の
高鳴りこそが
最果ての
海の潮騒だ！

夢に見た
波打ち際

ほっは

なぜ今になるまで
気付かなかったのか



そう
ゆめみ
海を夢見ている
余は今

ははは

なし
かき
波飛沫の
感
あし
じき
触

たとえこの身が碎け
どれほど血に
塗れようとも!

この瞬間

この時に
勝る至福が
あろうものか!





はああアアツ!!









此度もまた
逃げられ
なかった

見果てぬ夢は
見果てぬが
ままに終わった



だがあの夢は
生涯を賭けた
一度限りの夢
だったはず

にも拘らず
教奇な運命に
導かれ再び極東の
この地で夢を見た



二度も同じ夢を
見たのなら
三度目があっても
不思議ではない

つまりは――

そろそろ
次の夢を
見る頃合いだ

此度の遠征も
また……

存分に……

心躍った
のう……

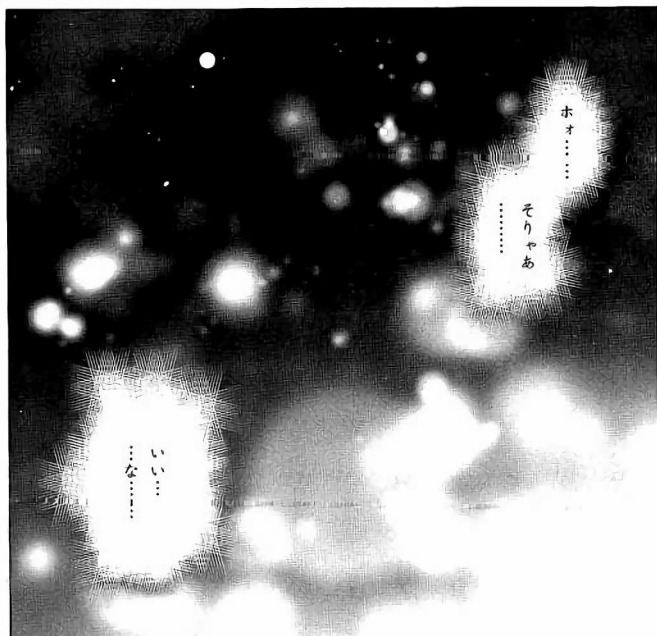
また幾度
なりとも
挑むか良いぞ
征服王

時空の果てまで
この世界は
余さず我の庭だ

故に我が
保証する



世界は決して
そなたを
飽きさせる
ことはない



ホオ……

そりゃあ
……

いい……
……な……

Fate 
フェイト・ゼロ



In the battleground, there is no place for hope.

What lies there is just cold despair and a sin called victory,

built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

it is best to end them in the best efficiency

and at the least cost,

least time.


Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

第 62 話







小僧^{こそう} お前^{まえ}が
ライダーの
マスターか？



違う^{ちがう}



ボクは――

あの^{ひと}人の
臣^{しん}下^かだ






ふむ？



小僧だが

お前が眞に
忠臣であるならば
亡き王の仇を
討つ義務がある
はずだが？

——
そうか




……オマエに
挑めば
ボクは死ぬ



当然だな

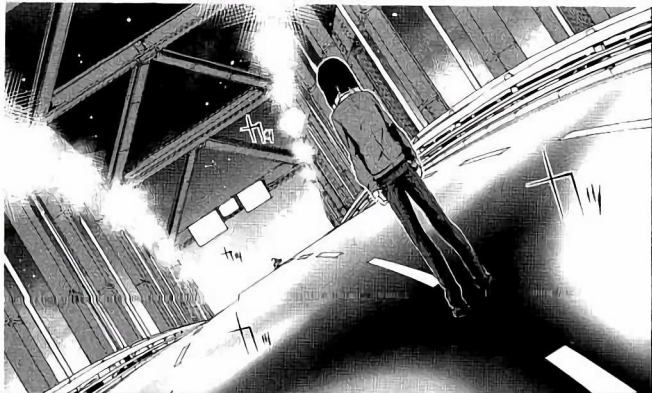


それは
できない



ボクは
『生きる』と
命じられた





……
終わった

……
僕の
聖杯戦争が

ボクが二人で挑んで
勝ち取った
初めての勝利

無様で
ちっぽけな
戦いだっただけ

生きて窮地を
免れたという
だけのこと

それでも
ボクは王命を
遵守した

すべてを見届け
生き延びた

ならボクは
この勝利を
恥じる必要なんて
どこにもない

褒めてほしい

あの大きくて
分厚い掌に

大雑把で
遠慮のない
洞間声に

今度こそ
胸を張ってアイツに
手柄を自慢できた
はずなのに……

いいや
褒め言葉なら
もう充分すぎる
ほどに贈られた




未来の分まで
褒められた
後なんだ

ボク

だから残る人生の
全てを費やして
あの賛辞に
釣り合うだけの
手柄を積み上げて
いくしかない

そう

あの言葉が
ある限り
ボクはもう
独りじゃない



ウェイバー・
ベルベットよ

臣として
余に仕える
気はあるか？



イスカンドルは
いつだつてボクを
笑顔^{えがお}で迎え^{むか}えてくれる

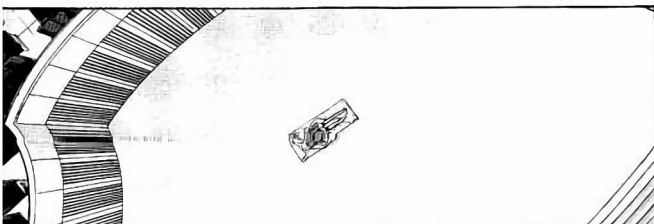
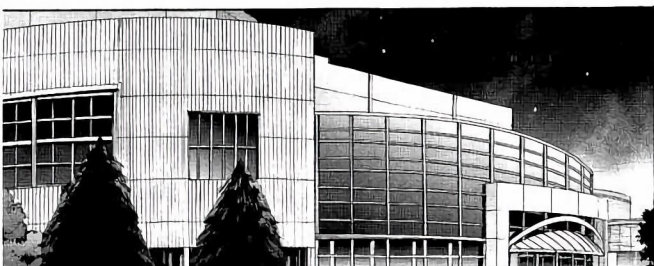
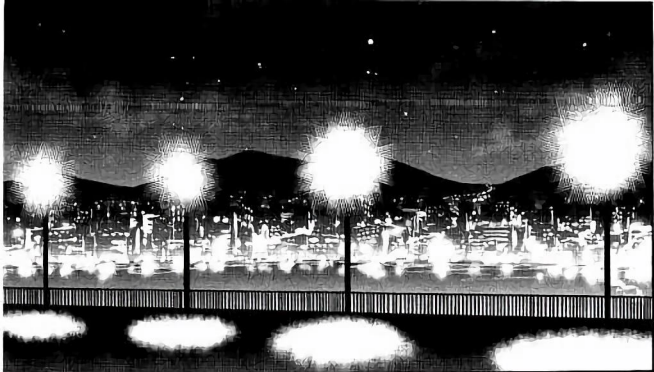
そう理解した瞬間
彼が少年であった
日々は終わった

そして彼は
初めて知った

ときに涙とは
屈辱とも後悔とも
無縁のままに
流れるのだと

ウェイパー・
ベルベットは
惜しげもなく
頬を濡らす

それは熱く
清々しい
一人の男の
涙であった



これは……記憶？

そうだこれは
一〇〇〇年に亘る
アインツベルンの
聖杯探求の旅――

私は今
聖杯の中身を
覗き込んで
いるのね

始まりの
ユステイーツア

そして
彼女を鋳型として
産み落とされてきた
数多の人の形
乙女たち……

ホムンクルス

偽りの生

錬金の
秘技により
紡がれ

見果てぬ悲願の
成就のためにただ
産み落とされては
使い潰されていく

ヒトの
姿をした
消耗品

ユステイーツアを
基盤として
共有する規格品


だからこそ私たちは同じ記憶を
痛みを共有して分かち合う



聖杯を——

どうかこの手に
聖杯を——

聖杯を——

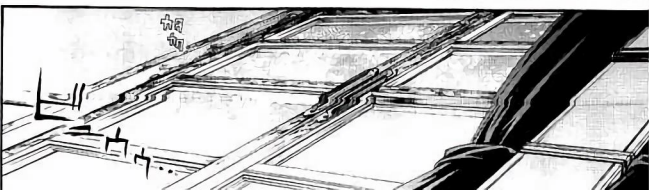
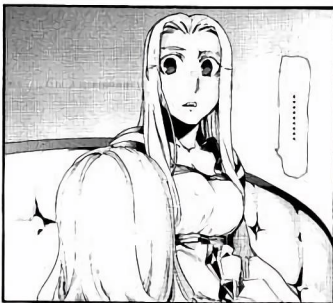
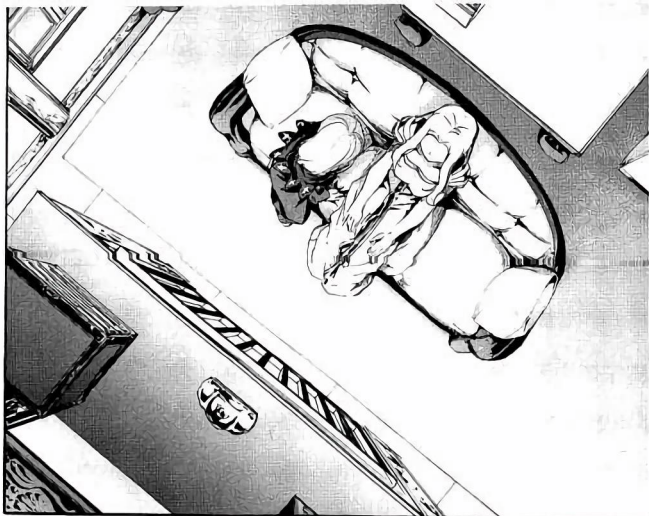


いいえ
私には……

私だけが……



どうして
泣いてるの？
お母様



ねえ
お母様

こわい
ユメを
見たの

イリヤが
サカズキに
なっちゃう
ユメを

イリヤの
中にね

ものすごく大きな
カタマリが七つも
入ってくるの

イリヤは
破裂しそうに
なって

とっても
怖いんだけど
逃げられなくて

そのうち
ユステイーツァ
さまの声が
聞こえてね

頭の上に
真っ黒い
大きな穴が
……

大丈夫よ……
決してそんな
ことにはさせない

あなたがそれを
見ることはないわ
イリヤ

あなたはきつと
運命の枷から
解き放たれる

私がすべてを
遂げるから

お父さんが
きつと叶えて
くれるから……

これは
聖杯が
見せる夢

こんなにも鮮明に
内側を覗き込める
ほどに器が
容を成している
というの？



これは
卵の殻が内の雛の
ハラワタを見ている
ようなもの……



じゃあ
外装であつた
自分は？

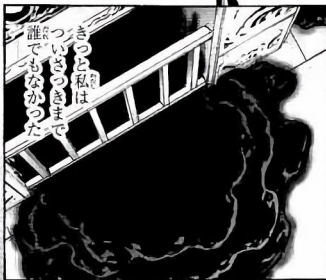
今こうして
夢を見ている
自分は誰？



私を
消え去つた

砕け散つた殻を
雛が啄んで
呑み込んだの
だとしたら……





きっと私は
ついさつきまで
誰でもなかった



そうだ

自分が誰で
あるかなど
些細なこと



そして今でも
アイリスワイイル
という人格を被った
何者かではない

それでも
この胸の中の
願望は本物だ



そう
私は祈りを
送るべきモノ

諸人の願望を
叶えるべしと

そう生まれ
そう仕組まれて
祭り上げられた
存在だったはず

お母様
……？

—ええ

大丈夫よ
イリヤス
フィール

終わりは
すぐそこまで
来ているわ

だから私たちは
少しだけ
この場所ですべて
待ちましょう

きつと
お父さんは
来てくれる

私たち
すべての祈りを
速げるために

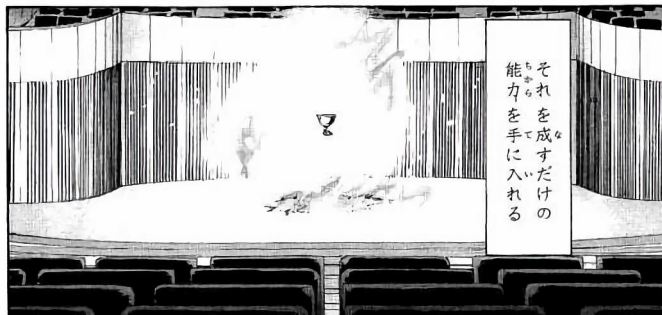




さあ すべて
の
嘆息なげきを刈り取ろう



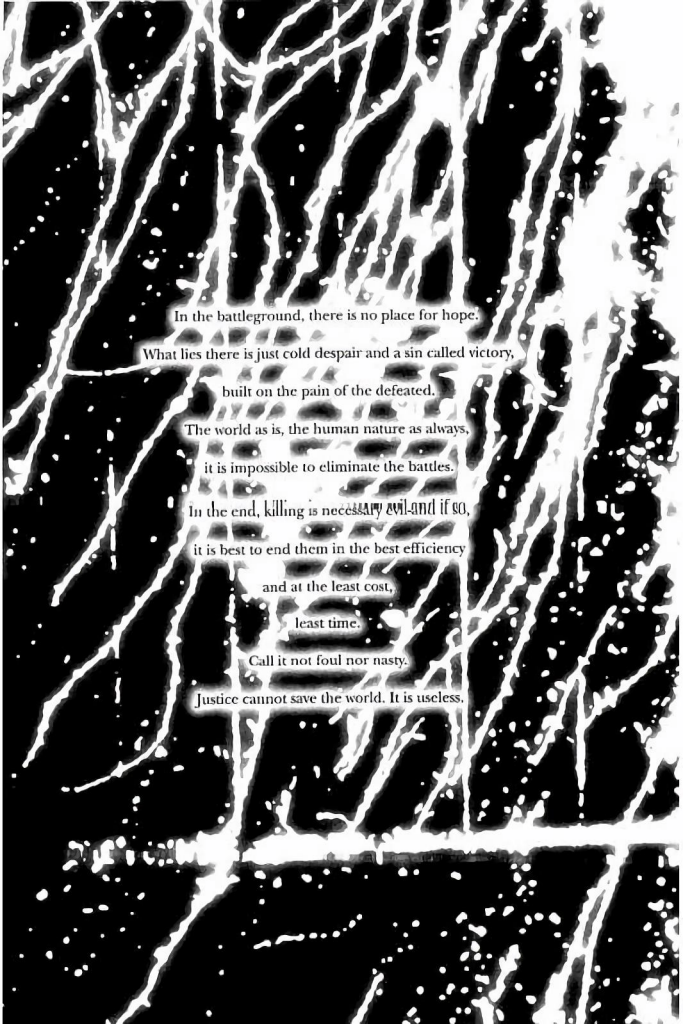
すべての苦悩くわう
を
刈り取ろう



それを成なすだけの
能力ちからを手てに入れる

すべてを呪い叶える
万能の願望機として





In the battleground, there is no place for hope.

What lies there is just cold despair and a sin called victory,

built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil and if so,

it is best to end them in the best efficiency

and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.